

早稲田大学  
創造理工学部・研究科  
広報誌

2016

16

〒169-8555  
東京都新宿区大久保 3-4-1  
Tel 03-5286-3000  
Fax 03-5286-3500

Creative People

# 創造人

<http://www.cse.sci.waseda.ac.jp/>

Interview

社会文化領域

内藤順子 准教授

ワールド・文化人類学、

ワールドワーク、

開発援助、巡礼聖地

今、開発援助に求められるのは、  
援助する側の意識革命。



## 急速にグローバル化する世界で、貧困に喘ぐ人々と共生していくために、やってはならないこと。 ——それは、援助する側が貧困者を無知で怠惰で悪に陥りやすい存在だと無意識のうちに見てしまうこと。

早稲田の理工で教鞭を執ることは「とても刺激的な挑戦です」という文化人類学者の内藤順子准教授。南米チリの貧困地域で身体障害児たちのための「地域リハビリテーション」の導入を推進した彼女は、開発援助を行う際に、援助される側よりも、援助する側の意識を変えることが不可欠だと考えている。早稲田で教鞭を執ることは、まさしく援助する側の意識改革に直結しているのだ。

### 貧困は“悪”であることは間違いないでも、貧困者が悪であるわけではない

「貧困は“悪”です。撲滅し、解消しなければなりません。でも、貧困状態にある人々の人間性が悪いわけではないのです」

そういう内藤准教授は、南米チリのスラムで目にしたことを例に挙げる。

スラムの住宅のなかには、床は土がむき出し、壁はダンボール、天井は発泡スチロールやビニールでできているようなものもあり、チリは国を挙げて住環境改善のプロジェクトに取り組んだ。支援者たちはスラムに赴き、まずは住民に聞き取り調査を行った。その際、次のような会話が交わされていた。

支援者「屋根はトタンの方が、雨漏りが少ないですよ」

住民「トタンって何？」

支援者「丈夫な金属です」

住民「じゃあ、それでいいよ」

支援者「壁はダンボールより木材のほうが安全です」

住民「それはそうかもなあ」

支援者「床にブロックを敷いた方が寒くないですよ」

住民「ふーん。そういうもんかね」

この会話で、支援者は、住民自らがトタン屋根、材木の壁、ブロックの床でできた住宅を希望していると報告する。これを受け、公的機関は資源を取り寄せ、スラムに届ける。

ところが、住民はいつまで経っても、資源を使わない。住環境はもちろん改善されない。材料は雨ざらしになったり、売られてしまったりする。これを見て、支援者側は「彼らは無知で怠け者だから、貧困のままなのだ」と考えてしまう。そして、次のように結論付ける。

「彼らは支援するに値しない」

内藤准教授たちが貧困地域に「地域リハビリテーション」モデルを導入していた時にも、似たような構造があった。

チリの首都サンチャゴ市にある国立リハビリテーション研究所では、スラムの身体障害児たちが退院後にリハビリを続けず、

症状を悪化させ、入退院を繰り返すという問題を抱えていた。この原因を医療関係者たちは、スラム住民が子どもたちの面倒をみないからだと思っていた。

しかし、内藤准教授たちが実際にスラムに赴くと、それが思い込みだと分かった。住民の生活を追ってみると、親は多忙で、子どもたちのリハビリに付き合う時間がなく、そもそもリハビリを行うために必要な広さを持った平面な床すらないケースもあった。

「支援者側は、知らず知らずのうちに、貧困者が無知であり怠惰であり、悪に染まりやすいと思い込んでしまいます。でも、それは援助する側の思い込みにすぎない場合があります」（内藤准教授）



スラムにおける地域医療展開のため、日本人医師と協働



チリの地域医療プロジェクトの際、障害児たちと

援助される人たちの環境、日常生活、気持ちや感覚を知ろうとしない、つまり、劣位においている相手の「改善すべき日常」のありようには敬意を払わないから、的確な援助が行えない。無知や無自覚は罪であるだけでなく、正しい判断を妨げる。

内藤准教授は、それがあたかも患者の病気や肉体だけを診て、患者の心や背景までを見ようとする医師のようなものだとし、こう続ける。

「まず援助する側に必要なのは『我々が一番であり、彼らは我々ようになるべきだ』と考えることをやめることです。たんなる“差異”を“優劣”におきかえてはならないのです。私たちも含めて、援助する側をリハビリしなければなりません」

## 人類学のプロセス主義とは、 相手を理解しようと努めること

教壇でこれほど語っても、次のように主張する学生がいるそうだ。

「でも、資本主義社会を生きるため、貧困地域の人々も僕達のようになるべきだと思います」

そんな学生たちに対して、内藤准教授はこう語る。

「『彼らのことを何も知らずに開発援助を行うのと、彼らの存在、環境、日常生活や生き方を知った上で開発援助を行うのでは、違いがありますよね。たとえ、同じ支援を行うという結論になったとしても、彼らのことを知ろうとし、交流するなかで、関係性は変化します。そのプロセスが大切なのです』——こう話すと学生たちはだいたい理解してくれます。実はこの姿勢が人類学のスタンスなのです」

文化人類学が最も大切にしているのは、プロセスだ。

植民地を調査する手法として発達した文化人類学は、植民地支配が終焉した後も、未開の地や異文化の生活・価値観を理解するための手法として残った。最近では、貧困地域や異なる階層を知る方法としても活用されている。

内藤准教授は人類学を恋愛に例えて説明する。

「好きな人にアプローチしようという時に、いきなり気持ちを伝えることはためらわれます。それよりはまず相手のことを知ろうとするでしょう。たとえば、周囲の人から趣味は何かとか、食べ物は何か好きかとかと情報収集します。その上で、相手に合ったアプローチはどのようなものかを考え、接近してみたりします」

情報を手に入れて、相手を理解しようと努め、仲良くなる——人類学もこのプロセスの積み重ねなのだ。

一方、開発援助のようなプロジェクトでは、期限や予算があるため、成果を出すことが最も求められる。いわゆる成果主義の名の下では、医者は、たとえば、手術の技術を現地の医者に教えて、できるようにすれば良い。人類学のプロセス主義とは真



逆の考え方だ。

だから、両者のあいだには相克が生じる。内藤准教授も医療関係者から心ない声をかけられた。「毎日遊びまわっているだけで、何の役に立つのか」と言われるのはしょっちゅうで、「そんなにスラムに行くのは、スラムに恋人がいるからか？」と言われたこともあったという。

それでも、粘り強くプロセスを積み重ねていった。

「人類学の場合、成果として報告できることは『子どもたちと話をしました。仲良くなりました』ということだけかもしれませんが、その子どもたちや保護者が私たちのことをやがて信用してくれて、信頼関係を育んだ彼らとの会話からは、余所者では思いつかないアイデアやヒントがたくさんできて、地域リハビリの実現に結びつくこともあるのです。この作業はものすごく時間がかかりますし、成果が出るかどうかはわからない。でも、このプロセスは決して無駄にはなりません」

チリにおける地域リハビリテーションの取り組みは、活動が軌道に乗り、無駄になるどころか、大きな成果を取めた。そして、現在も当事者の主導で機能している。そのみならず、チリは国家政策として、この取り組みを近隣諸国に輸出し、南々協力するに至っているのだ。

早稲田で行う授業も、内藤准教授にとっては学生たちを知るためのプロセスなのかもしれない。そのプロセスは着実に成果を上げつつある。

社会環境工学科で学ぶある学生は、「内藤先生の授業で、開発援助も現地のニーズを把握しなければ、その意味が半減することを痛感した」「ニーズはもちろん、相手の文化から学ぶことが重要だと思う」と語っていた。次代を担う学生たちの意識を着実に変革している。

## 貧困は解決できる問題ではない だからこそ、プロセス主義で進め

チリで地域医療に取り組んだ経験を生かし、2015年にあらたな取り組みを開始した。今回は日本で、地域医療と予防医療のプロジェクトの調査だ。

北海道千歳市にある北海道千歳リハビリテーション学院（専門学校）の教員と理学・作業療法士を目指す学生が、地域住民に向けて「健康増進教室」を開催した結果、地域住民の健康状態に改善が見られた。筋力、脳力、バランス能力などに関する数値が軒並み上昇したのだ（半年間を1クールとして、月に2回実施）。このような教室を自治体が開催するケースはあるが、学校が開催するのははじめて。この取り組みに内藤准教授は期待する。

「この専門学校は、2017年度から大学になる予定。予防医療と街づくりが一体化したこの活動には可能性が詰まっています。健康のみならず、地域住民と学生との交流により、地域活性化や若者の地元就職を促すことにもつながり、高齢社会にむけての地域再構築にもなり得ます。このアイデアや実施プロセスから学ぶことは多くあって、日本の他の地域や、場合によっては日本と同じ高齢社会を迎えつつあるチリでも実施可能だと思っています」

一方、日本でもさまざまなかたちで貧困が広まりつつある。内藤准教授も、母子家庭の貧困やワーキングプアの問題にも関

心を抱き、身近なところから調査をしているが、日本の貧困と途上国の貧困とは根本的に異なると見ている。日本の貧困は子ども、若者、母子家庭やホームレスなど、不十分な社会制度から生み出される孤立しがちな存在ゆえの問題であるのに対し、途上国の貧困はファミリー全体が抱える問題だからだ。関わるべき対象も異なるし、関わる方法も変えなければならない。

「ですから、チリでのやり方を日本でやっても無駄です。日本の貧困は、日本の土壌に根ざして考えなければなりません」

貧困も地域医療も、現場でプロセスを積み重ねてはじめてやるべきことがわかるのだ。決して簡単なことではない。

特に貧困について「あまりにも大きくて、解決できない問題である」と内藤准教授はとらえている。その理由はこうだ。

「解決できるはずだ、と意気込みすぎると燃え尽きてしまいます。逆に、そう簡単に解決できないという前提に立っていれば、少し余裕が生まれて目の前の細かいことにも、丁寧に取り組むことができます」

しかし、丁寧な取り組みの積み重ねが、いつか先進国の貧困に救いをもたらす新しいモデルになるのではないかと期待してしまう。実際に、彼女の行動はチリで大きな成果を生み、彼女の言葉は早稲田の学生の意識を変えているのだから。



北海道千歳リハビリテーション学院が地域住民にむけて開催する「健康増進教室」の様子